

# 柳宗悦の沖縄文化論

渡名喜明

(一)

柳宗悦のいわゆる「民芸」は一般に「民衆的工芸」と解されているし、また本人もそのように述べることが多い。それに彼の著述ももっぱら工芸の分野に限られている。しかし、彼の視野はけっして工芸品に限られていたわけではない。あえていえば、彼にとって「民芸」とは民衆の芸術であったといえる。彼は「沖縄の民芸」の冒頭で次のように述べている。「広く考へれば民謡、民歌、民劇、民踊、民画など凡そ『民』の字の付くものは『民芸』の中に包まれてよい。併しそれでは余りに視界が広がるから、便宜上狭い意味にこの言葉を解しよう。さうして形のある品物の分野にそれを限ることにしよう。」<sup>(1)</sup>

那覇に滞在していた頃、八重山の女性で民謡の上手な人がいて、よく謡ってもらった、聞いてみたら「三百ぐらい」も民謡を知っているということでびっくりした、という回想を柳は「沖縄の思い出」のなかで述べている。また柳等の沖縄滞在中、織物の収集や生活面で世話をになった喜久山添采の母堂おみとは、柳等が帰京にあたって礼を言いに来てくれたことに感激して、即席で自作の歌をつくり、沖縄のリズムにのせてうたったという。<sup>(2)</sup>

日本本土では、綴る歌と唱う歌がとうの昔に分離し、しかも職業化、専門化しているのに、この沖縄では歌人でも何でもなく、文字すら知らないような人たちが、次々とすばらしい歌をつくり、うたう。そのことに柳はずいぶん心を動かされたらしい。日本でいえば遠く万葉の時代がそうであった。何も柿本人麿や山辺赤人たちだけが歌人としてすぐれているのではない。読み人知らずの歌にいかにすぐれたものがあることか。この時代の歌人には文字を読めない人もいたのではないだろうか。しかし、歌を詠む人であれば、その作に上下はあるとも「誤ったもの」、「醜きもの」、「偽りのもの」はひとつとしてなかったであろう。沖縄にはその万葉の時代が現存していると柳はいう。「歌が個人からではなく、何かもっと深いものから生まれてくるのです」。<sup>(3)</sup>

同じことは音楽についても、また舞踊についてもいえる。「沖縄の音楽や踊は日々の暮らしの中に浸み込んでいて、むしろ暮しがそれ等のものの中にあるのだと云ってよいと思ひます」。ここでは誰もが文学者であり、音楽家であり、舞踊家である。あるいは、それ等の区別以前の世界がここにある。<sup>(4)</sup>元来、詩歌と音楽と舞踊はひとつであった。ところが時代を経るに従って三者に分化し、専門家と素人に分離したのである。

生活に芸能があり、芸能に生活がある。この事実は民芸品の豊かさとともに、柳を驚嘆せしめた。美術が工芸から分離し、「美」が民衆と生活から遊離しているのが現在の状況だが、もともと美は一部の美術家の占有物ではなく、庶民のものであって、彼等のつくるものには巧拙のちがいこそあれ、醜いものはない。生活と交わる工芸、無名の民衆を担い手とする工芸にこそ美の本流があり、美の未来もまた工芸に帰すべし、という柳の美学からすれば、芸能と工芸の違いこそあれ、民衆とともにあり、生活と

ものあるという点で両者は共通している。柳が沖縄の芸能に驚嘆したのも無理のないことであった。

(二)

柳宗悦が初めて沖縄を訪れたのは昭和13年の暮れから14年正月にかけてのことである。沖縄県の学務部長山口泉の招聘であった。この第1回の沖縄行きの収穫について、柳は次のように述べている。「何よりの収穫は此の南海の孤島が其の言葉と同じように、最もよく其の工芸品に伝統を残して、今尚優れたものが数多く作られ又用いられていることを知ったことであった。特に織物は特筆さるべきであろう」。<sup>(5)</sup>ここで言語というのはいうまでもなく、後に有名な「方言論争」のもとになった沖縄語（方言）であるが、ここでは方言そのものに限らず、その方言と結びついた前述の歌、音楽、舞踊を合わせて考えてよい。柳がこの言語と並べて特に「織物」をあげたのは注目に値する。というのは、彼は、沖縄の種々の工芸品の美しさについて書き記してはいるものの、特にこの織物、その中の芭蕉布を選び出して、彼自身の民芸論を体系的に物語る例証としているからである。

彼は「芭蕉布物語」の前書で次のように述べている。「ですからこの物語は、芭蕉布のことをできるだけ正しく伝えるのではあります、実はそれを仲立ちにして、品物に潜む美の捷を語ろうとするものであります。謂はば芭蕉布という特殊なものを借りて、普遍なものを説こうとするのであります。…私は物へのよい例証として芭蕉布を選んで来たのです」。<sup>(6)</sup>第2回沖縄旅行から帰ってしばらくたった昭和14年夏に書きあげた「沖縄の富」の序文では、この文章が「沖縄に就いて嘆く人々」、「この島に就いて誤った考えを抱く人々」、「自国を余りにも卑下して考える土地の人々」とあわせて「真理を愛する凡ての人々」のために役立つように望むと述べているが、彼の沖縄文化論の基本的立場は、沖縄の文化がそれ自身としてすぐれていると同時に、普遍性をも持っているというものであった。

さて、それでは柳は芭蕉布の話を通じて何を語ろうとしたのだろうか。まず、彼のいう民芸品が土地の自然や風土と密接に結びついているということである。そもそも芭蕉布をつくる糸芭蕉そのものが南国特産である。その糸芭蕉の外皮を剥がすと、「真白な、思わず手で撫でたいほど滑かな光沢のある皮」があらわれる。茎には縦に長く纖維が走っていて、この纖維を竹片でしごくと美しい纖維のみが残る。この糸は清潔で、純潔で、美麗で、強靭である。「由来凡ての工芸は材料あっての工芸でした。工芸が地方的性質を有つのはその故です。…沖縄の地理なくして芭蕉布は生れなかったのです。品物は材料の恩恵を受け材料は地理の恩澤に浴するのです」。<sup>(7)</sup>染料は山藍（琉球藍）とティカチ（車輪梅）を使う。この藍は本土の藍とくらべて建てやすい。それに藍はどのように染めても、また濃く染めようと薄く染めようとも、さらに色が落ちようとも醜くなることがない。ティカチは皮を煎じて染めるが、概して自然染料はどれも醜く染まるということがないのである。民芸の美はいってみれば材料の美、自然の美、風土の美である。

芭蕉の糸は適当な温度と湿度のもとでなければ機にかかる。空気が冷たかったり、乾いたりすると糸は折れてしまう。高温高湿の沖縄の風土そのものが芭蕉布に適しているのである。また芭蕉布は沖縄の夏の着物として最適である。風通しがよくて涼しい。それに外から帯をしないので暑苦しくない。芭蕉布あっての沖縄の夏であり、7、8月頃ともなると首里や那覇の町はこの美しくも涼しげな着物で飾られてしまう。その材料、工程、着用のどれをとっても、芭蕉布がまぎれもなく沖縄の自然と風土から生まれたものであることを示している。

糸芭蕉からとれる纖維は長く繋いで糸にしなければならない。仕事そのものは簡単であるが、糸にするには大量に要る。目にもとまらぬ早業で仕事は行われるが、単調な仕事で時間が要る。女達は、2・

3人、時にはもっと大勢の者がひとつの家に集まって糸績みをする。女達のなかで年のいった者が靈譚(たましい話)や浮世話をして聞かせる。そうしているうちに仕事は進み、緒桶はいつのまにかいっぱいになる。そして、その家で績んだ糸はその家のものとなる。こうして順々に績み手が各家を訪れる。「工芸は度々家庭の工芸ではないか。夫も妻も子供も孫も一つの仕事へと精進する。広くしては一村一郷の工芸ではないか。村の者は挙げて皆相互を助ける。そこには結合せられた衆生の姿が見える」。<sup>(8)</sup>「衆生の一人は弱くとも集る時は力強い」。<sup>(9)</sup>かくして民芸の美は協働の美であり、社会の美である。女達の相互扶助はその例証である。

しかし、特に沖縄の織物を美しくさせたのは、縞や格子にしろ、絣にしろ、それらが幾何学文であることによる。その中でも絣の場合には、「手結い」と称する技法からして、人間の意志ではどうにもならぬ制限があって、これが逆に美しいものを生み出している、と柳はいっている。手結いというのは、緯糸を布幅より余分に見積もってとったうえで、いくつかの単位を決めて糸でくくり、これを浸し染めにして絣柄をつくる手法のことである。機の上で織る段階で、余分にとった分だけ右や左に緯糸をずらせて柄をつくるということになる。ずらせる幅ははじめて決められていてそれ以上ずらせようがないから、その範囲でのみ柄がつくられるのである。だから絵図を使った絵絣のように好きな柄を自由に作れるという訳にはいかず、どうしても幾何学文になってしまうのである。しかし考えてみると織手の側からみて不自由な技法だということは、裏をかえせばそれだけその技法に自然の理法がつらぬかれているということである。同じことは絣の「ずれ」や「ぼかし」についてもいえる。糸を括って染めるものの、人間の手わざでは若干の狂いが生じるし、いくら強く括ってもそのはじには染料がにじんでしまう。それが柄のずれやぼかしを生じる。これも人間の側からすれば失敗ということになるが、自然の法からすれば理にかなっている。そして実にこの絣のずれやぼかしこそ絣の美しさの秘密となっているのである。

芭蕉布の場合には、それが手仕事でなければならないという事情も、その親しさ、美しさを保証する理由となっている。芭蕉の糸はその性質上機械にかかりにくく、どうしても手織でなければ織れないという。そして手織だからよく織れるのであり、今も昔に負けないすばらしいものが作れると柳は見るのである。なぜ手仕事には美しいもの、自然なものを生む可能性が大きいのか。ひとつには「直接人間の心に繋がりを持つことで、謂わば手仕事がいつも人間的な性質を帯びる」ためである。それに「人間の手ほど巧妙な機械はないと思います。力とか速度とか正確さとかには限度がありましょうが、併しその創造性、順応性、自由性、異質性の如きは遠く機械の及ばないところであります。…人間は固定的な画一的なものより、創造的な自由な品物をもっと愛するからであります」。<sup>(10)</sup>民芸の美は手仕事の美でもある。

### (三)

ひとりひとりを見ると、力も弱く、特別な芸能的才能に恵まれているわけでもない。それなのにどうして沖縄の人々は誰もが歌い手であり、舞い手でありうるのか。彼個人ではなく、「何かもっと深いもの」がその背後にあるからである。それは時代とも世相とも社会ともいえる。伝統といつてもよい。またそれほど学問がある訳でもない女たちがどうしてあのようなすばらしい芭蕉布をつくれるのだろうか。そこに自然の加護があり、社会の力があるからである。そしてもうひとつ伝統の力がそこに働く。「伝統はその土地の自然や風土を故郷とし、歴史や風俗をわが家として育った。土地土地に準じて様式を異にし、手法を異にした。…伝統はいわば律（おきて）であった。人間の体験が帰納した法則であった。何をどう作るべきか、どう作ってはいけないか。そのことへの指針であった。だからこれに従うのは安全

に仕事をすることができた」。伝統とは祖先達の理知や経験の結晶である。女たちが自分で織っているというより、伝統が女たちに仕事をさせているといった方が適切なくらいである。しかし、自然、社会、伝統のいずれにも増して彼等のつくる品物の正しさ、美しさを支えたのは彼等の信仰であった。「精靈への信仰こそ沖縄人の凡ての生活を支配してゐる原理なのです。このことへの理解なくして沖縄の美をすることは出来ないでせう。さうしてこのことへの理解こそは美の問題について、大きな示唆を与えてくれるのです」。<sup>(12)</sup>

柳宗悦はもともと宗教学者であった。その彼がいわゆる「下手もの」の美に関心を示し、熱中し始めたところ、彼の友人のなかには、柳は宗教への思索を離れて「奇異な」問題に外れたとしてこれを嘆く者がいたという。しかし彼にとって、美の問題と信の問題ははじめから別のものではなかった。彼の民芸論についてのはじめてのまとまった昭和2年の著作『工芸の道』の序文で彼は次のように述べている。「工芸という媒介を通して、私の前著『神に就て』（大正12年2月発行—引用者注）に於て模索し得た最後の道『他力道』の深さと美しさをとともに見つめたのである。従って工芸を物語ってはいるが、私としてみればやはり『信』の世界を求める心の記録である」。<sup>(13)</sup>

正しいもの、美しいものの背後には何等かの意味で宗教心がある。「不二」の教えを説く仏教や愛の音づれを説くキリスト教でもいいし、あるいは自然の力を信じ、タブーを恐れるような原始宗教でもよい。即成の宗教でなく何か永遠なもの絶対的なものに対する場合でもよい。そうしたものに対する畏敬の念が生じる時、我々の心には宗教的なものが生じ、「私のない、自分を忘れる心」、謙譲の心、「素直なこだわりのない心」が生じる。この「私」の忘却こそ人間を二元の対立する相対的な世界から離脱せしめ、美の浄土へと導くのである。作者は無名で学の浅い職人や職人芸をもった者たちだが、その作品は自我を主張し、個性を表現しようとする美術家や工芸美術家の作品をしのぐ。彼等は美しいものをつくろうだと、それで名誉を得ようとしてつくったのではなく、ただ、ありのままにつくったのである。彼等からすれば、これは無理のないことであった。製品は廉価である。だから沢山作らないと生活ができない。だから美やら醜やらにこだわってはいられない。無心に数多く作った。しかし、そこに美を生む基礎があったのである。労働の美は多の美であり、無心の美となる。それは「私」と「他」、美醜を越えた不二の美である。浄土教の教典である『浄土三部教』のひとつ「大無量寿經」の六八の大願いわく「若し私が仏になる時、私の國の人達の形や色が同じでなく、好（みよ）き者と醜き者とがあるなら、私は仏にはなりませぬ」。柳はこの大願を單に人間の美醜にこだわらず「仏の国においては美と醜の区別はない」と解釈する。<sup>(14)</sup> 仏教では「本来衆生悉有仏性」とか「仏性本有」を説く。人間は本来悉く皆淨い仏性を受けて生まれている。そういう本来の性質が何ものにも障げられずに自由に働くような境地にあれば、何人といえども醜いものと縁がなくなってしまう。「個人が努力して良い仕事を産むのを讃美するなら、大勢の無学な女たちが平気で美しいものを作り上げることを尚讃美できぬでせうか。私達は誰が作ったか分らない芭蕉布の美しさの背後に、何か抨みたいもののあるのを感じます」。これが「芭蕉布物語」の最後を飾る文章である。民芸の美は、他力の美、他力にまかせきった平常の美、無事の美だということである。<sup>(15)</sup>

（四）

くり返すことになるが、柳宗悦の沖縄文化論の基本的立場は、沖縄の文化がそれ自身としてすぐれていると同時に、普遍性をももつている、いいかえれば普遍性をもつてゐるが故にすぐれている、というもの

であった。柳のこうした立場は、彼が来沖した当時の県当局の政策が、（沖縄語問題などのもつ）沖縄の「特殊性」を強調し、これを「普遍化」（同化＝「日本化」＝「近代化」）しようとする対する批判でもあった。

昭和15年の1月、第3回目の沖縄訪問の際公式の場で柳等が県の標準語勵行の行きすぎを批判したことから端を発したいわゆる方言論争は、柳等民芸協会同人、県学務部、マスコミ、東京の知識人等の間でほぼ1年にわたって続いた。

この論争で浮き彫りにされた問題というのは、つまるところ沖縄にとって近代化とは何か、沖縄にとっての振興とは何かということであり、沖縄の場合にはそれが為政者にとっても、また大半の県民にとっても「日本化」を意味したというところにある。そして、日本が太平洋戦争の渦中にあり、時あたかも「皇紀二千六百年」にあたっていたという状況が背後にあった。この「日本化」運動の最たるもののがこの標準語勵行と琉装廃止、和洋服着用奨励であった。この両者についての教育者の意見を『琉球教育』から引用してみよう。

「琉球語は内地語と同語源なりと雖ども今日に至りては一方言たるに過ぎず、而して普通語と彼此相通せざるが如きは啻に國家の統一を欠くのみならず事々物々不利弊害を來すこと弁を持たず此地素新領地にあらずして新領地の如き感あるは言葉の差異に關すること大なり故に普通語の普及を図るは本県を同化するの急務」<sup>(16)</sup>である。

男子教員の服装はすでに和風あり、洋風ありで「日本帝国々民の風俗として、國家統一の上に対し、豪も他府県と相譲ら」ない。「而るに女子の服装たる、他府県と自ら殊に、今日猶ほ古代服を用ひ、六七百年、一の変化なく、世と相伴ふて進歩せず。蓋し此服装は、日本帝国以内の物たり、其性質より之を論ずれば、固より咎むべき者にあらず。…或人云く本県女子の服装は、本県女子にして自ら適せり、毫も間然する所なしと。是亦一理、其適すると否とに至りては、誰れか其れ異議あらむ。如何せむ今日の時代は、昔日の時代にあらず。…啻に世と相伴はざるのみならず、國家統一の上に対し、自ら国民の要素に關し、我か風俗に就て、仔細に之を考ふれば、国内三府四十三県中、独り本県か他と自ら殊るは、外部より之を評するも、或は内部の感情に訴ふるも、之を一種異様の風俗と謂はざるを得ず、…均しく是れ帝国国民なり、而して本県独り風俗を異にする。是れ豈に黙止すべけんや」。<sup>(17)</sup>

方言にしても琉装にしてもこれが日本の古風をとどめるということに異議はないものの、すでに現実の生活にそぐわない面がある。これらのために他府県人から異民族扱いもされかねない。そして国家統一のために方言や琉装は弊害になっている、ということである。2つの論調はどもに明治時代のものだが、このような教育政策は昭和15年の段階では一般民衆の間にもずいぶん深く根をおろしていたようである。1月21日の「沖縄日報」では兼城静という読者が「私どもの標準語奨励は県民をして一人もらさず日本人たらしめんとする啓蒙運動であるのだ」と述べているし、同じく1月13日の「沖縄日報」では、方言や琉装を賞讃するのは沖縄県民を励ますことにはならない、沖縄は「慘め」で「文化程度の低いところだからこそ、躍進日本と歩みをともにしようと一生県命」になっているのだ、という女性の主張が載っている。<sup>(18)</sup><sup>(19)</sup>

柳が方言論争で主張したことは2つに要約される。ひとつには言語というものがその土地の民情を直接的に表現するものであり、自然や歴史や性情や風習の有機的な結合から成っている。言語はそれらの固有性を直接表現するものであって、その言語を捨てることは、独自の文学を失い、音楽を失うことになる。

なる、ということである。もうひとつは、沖縄語は純粋の和語を数多く残しており、将来の標準語決定にあたって貴重な価値をもつ、ということであった。この主張の裏には、柳の近代日本に対する批判がある。

柳にとって明治以降の日本がヨーロッパから資本制をとり入れ、機械をとり入れ、芸術をとり入れ、科学をとり入れたこと、要するに近代化の道を歩み始めたことが日本の伝統的な美、工芸の美を失わしめた大きな原因である。特に都市でその傾向が著しい。多くのものが外国への追従、不必要的模倣に追われ、品物が醜くなってしまっている。これに対して、地方には、まだ伝統的な美しいものが残っている。「日本が若し地方の文化を失うなら、日本と呼べるべき特色の何ものをも失ふに至るだろ。地方こそは日本的なものを保有し建設する貴重な単位である。日本の血の交り気のない流れは、地方にこそ見出されるのである。そこでは民衆がよく日本的なものを支えてゐるのである」。<sup>(20)</sup> 外来のものを摂取する時期はもう熟しきっており、今や日本固有のもののに上に日本を再建する時が来ている。もちろん今後とも外国のものを学ぶことに怠けてはならない。しかし日本自らを学ぶことにもっと勤勉でなければならぬ。文化は国際的に拡げられると同時に民族的にも深まられねばならぬ。これが方言論争の渦中にあらぬ。昭和15年6月に書いた「地方性の文化的価値」の主張であるが、同じことが日本語についてもいえるというわけである。沖縄の言語に限らず、能のおもかげを残す踊りや衣裳、天平の建物を思わせる屋根瓦、万葉時代を現出する文学などを柳が激賞するのもこのようない認識による。

『琉球教育』の記事でもわかるように、沖縄の教育者にしても、沖縄が日本の古俗を残していることに異論はない。言語問題に関しては柳の主張に反論する者も沖縄の民芸品の美しさについて反論する者は少ないのである。問題は、現在の沖縄を文化的に遅れた、非日本的なところ（他府県と見た目に違うという意味で）として否定的にみるか、それとも日本固有の正しい文化を保持しており、沖縄をその意味で最も日本的なところとして積極的に肯定するかのちがいである。内容のちがいこそあれ「日本的」なものを目指すという方向性においては両者にちがいはない。

ただここで問題となるのは、沖縄にとって「外来」の文化とは、柳のみるように単に西欧的な文化だけではなく、日本本土の文化もそうであったという歴史的事情である。沖縄が日本固有のものを残しているということは、沖縄が他府県とはちがった独自の歴史を歩んできたことの証しでもある。昭和15年の時点での沖縄にとっても外来のものを摂取する時期が熟していたかどうか、沖縄を単に日本の一地方とみて、中央と地方の関係だけで問題の全容を把握できるのかどうか、そこらのことについては柳の主張にも検討の余地がありそうである。

#### (五)

何をもって「沖縄の富」とみなすか。それは沖縄の民衆にとって古く、かつ新しい問題である。「人は文化の程度を、只土地の広狭で計ってはならぬ。只経済の多寡で数へてもならぬ。工業の新旧で評してもならぬ。眞の貧富はどれだけその国が多く文化価値を有するかに掛る。ここに価値とは正しきもの、誠なるもの、美しきもの、健やかなるものを云ふ」。<sup>(21)</sup> いうまでもなく、柳からすれば沖縄は富に充ちあふれたところである。このような前提に立って、柳は「沖縄の振興を計る道」として次の2つを提案する。

(一)他府県の者が沖縄の存在を尊敬することである。そのためには文化価値としての優れた沖縄が正当に紹介され、理解されねばならぬ。

(二)沖縄県人が自己の文化に対して自信を持つことである。何よりこの精神振興が沖縄の将来にとって大切である。今までのように不必要的卑下を早く放棄せねばならぬ。<sup>(22)</sup>

この2つの提案は、第1回沖縄旅行の9ヶ月前すなわち昭和13年3月に書かれた「全羅紀行」で、朝鮮の工芸品の振興に関して提起した提言と類似している。当時の朝鮮は日本の支配下にあって、日本の同化=皇民化政策のため、伝統的な工芸品が次々と店先から姿を消す状況下にあった。そしてかわりに日本の粗悪な品物が入り込んでいた。こうした傾向を是正する道として柳はひとつに朝鮮の人たちの固有の品物に対する自覚の必要をあげ、もうひとつとして日本人によるそのよさの紹介の必要をあげているのである。大正11年日本総督府が朝鮮王宮の正門である光化門を取り壊さんとしたことに対して、切々たる情を綴った反対の文章を書き、また陶磁器をはじめとする朝鮮の工芸品を愛し、その作者たる朝鮮の民衆を愛してきた柳からすれば、沖縄が朝鮮と似た状況に置かれているのを目撃して、同じような提案をしたのはもっともなことだといえる。

「沖縄の富」とは何かを問うことは、沖縄人にとっての幸福の道を問うことと同義である。その点で1月26日の「沖縄日報」に載った国吉真義の一文は、当時の県民のかなりの部分を代表する意見と考えられる。「県民生活のレベルを高め日本国民として世界の競争場裡に立って飛躍するに後れを取らぬやう努力することは、寧ろ国家的運動とも云ふべきで、標準語を常に文化的に後れてゐる県民の他府県より励行すべき立場にある」。「県民全体は東亜建設のために働くべき秋である」。「十年かかるを五年に短縮し、速に方言生活から逃れて標準語の熟達を計ることが県民の幸福を招来する所以であると思ふ」。県民にとって幸福を招来するはずだったこのような「努力」の報いがかの悲惨な沖縄戦であったことを思えば胸がいたむ。が、そのことはともかくとして、標準語励行運動や風俗改良運動が国や県にとっては戦争政策の一翼として、すなわち教育というより以上に政治の問題としてとりあげられ、また県民からは異民族視されることから免れる方策とされ、文化問題というより社会問題として深刻に受けとめられたが故に、これを主として文化的な面から論じる柳らの主張と論理がかみあわなかつたのも無理のないことであり、また論争がそうした性格をもたざるを得なかつたところに沖縄のもつ悲劇があったともいえるだろう。

#### (六)

ところで、わたしがこの文章を柳宗悦の「沖縄民芸論」とせず「沖縄文化論」としたのには訳がある。ひとつには、彼の言語、文学、音楽、舞踊に関する見方を紹介したかったためだが、それよりも、彼が紹介し、賞讃する沖縄の工芸品のなかには、彼のいう民芸品に概当しないものがけっこう含まれているため、「沖縄民芸論」として文章をまとめることをためらったということが大きい。柳によれば民衆的工芸とは次のような性質をもつ。

- (一)、一般民衆の生活のために作られる品物だということ。
- (二)、どこまでも実用を第一の目的として作られるということ。
- (三)、多くの需要に応ずるために多量に揃えられるということ。
- (四)、あたうかぎり低廉を旨として出来る。
- (五)、作る者が職人達であるということ。<sup>(23)</sup>

ちなみに『沖縄の人文』所載の写真をみてみよう。27枚のうち赤絵碗、紺地の大柄絣、紅型と型紙、ハンタン山の道と城壁、弁財天堂、崇元寺、玉陵、円覚寺と石橋、識名園と石橋、首里城歓会門の石獅子、赤瓦屋根の獅子、自了筆馬図、世持橋勾欄拓、石燈の18枚は自了を除けば作者こそ職人たちであれ、それらは

王族、士族のものであって、一般民衆の生活とは縁のないものであった。写真だけでなく、この著作の内容においても、柳は王族、士族使用の工芸品と民衆の使用する工芸品との区別をはっきりさせていない。

歴史学者の比嘉春潮は昭和14年11月発行の『民芸』琉球特集号で「今民芸として見るに足るものは紅型、絣でも漆器でも陶器でも、殆んど都會地で製作されたものか、又は政庁の役人の監督の下に製作された御用品であらう」と述べている。<sup>(25)</sup> 都会でも民芸品がつくられるることはありうるから問題があるとはいへ、古いよい作品の多くが王府の御用品か士族の愛用品、いわば「上手もの」の部類に属したものであったということは十分考えられる。というのも王族や士族にのみ所有を許され、農民には禁止されたり制限されるような工芸品が多かったからである。

特に衣料については、身分的な区別はかなりはっきりしていた。衣服の布地や染料や柄のちがいで身分がわかるようになっていた。まず百姓は原則として木綿と芭蕉布以外の着用を禁止された。色にも制限があり、たとえば福木やウコンで染める黄色は王族の色で一般には禁色であった。農民には縞の太いや格子柄、絣、ムディアヤ（2色縞合わせ糸）も禁止、浮織や紡織も原則としては禁止された。

それに久米島や先島にとって御用布貢納は重税を意味した。納税のための苛酷な労働があり、苦しい生活があったにもかかわらず、彼等が美しいものを織れたのは、彼等が本来具有する仮性によるといわれても、当事者たちは納得しなかったであろう。支配者たちの政策による辛苦の生活の中にあって何故の仮性かと。

沖縄語にもまた身分の区別があった。首里の王族、士族の使うことばが公用語とされた。一般民衆にはこのことばを使うことは許されなかった。それに各島々、各村々によってことばのちがいがあった。隣りの島に渡ればもう話が通じないという現実があった。沖縄にはどの村々、どの島々にも通用する共通の沖縄語というものはなかったのである。

「女教員の服装を改革して普通服と為すを望む」と題する前掲の『琉球教育』の記事は、かりに平民出身の女教師が首里那覇の小学校に奉職し、沖縄の平民の服装をし、平民の言葉で、士族家庭の服装をし、士族のことばを話す娘たちに授業をしたところで、彼女はまるで「老碑」の扱いしかけず、教師の威厳、学校の神聖を地におとすことにしかならない、と述べている。和装や洋装への「改善」、「標準語」の奨励は「上」からの要請ではあったものの、一般民衆からすれば、旧来の支配・被支配の関係から社会という場において脱却する手だてともなっていたということである。ただし、それは「日本」というより強大な「国家」の支配下に包摂されるということでもあった訳だが。「標準語」の普及が離島ほど早く、首里、那覇では遅れたというのもここら辺の事情によるものであろう。

柳の沖縄文化論の問題点をあげるとすれば、沖縄内における支配者と民衆や離島との政治的、社会的関係をあいまいにしたまま、いいかえれば、沖縄の「民衆」とはどの部分をさすのかをあいまいにしたままで沖縄文化論を展開したということがまずあげられるだろう。沖縄の「民衆」を彼が来沖した昭和13～5年時点での沖縄県民を指すとすれば、王朝時代の工芸品についてふれることはできないだろう。王朝時代の民衆とは農民を主体としており、職人といえども半農半工が多がっただろうが、彼等は種々の禁制と重税に呪縛され、王族、士族ほどに美しい工芸品に囲まれた訳ではない。王族、士族愛用の品々は、「上手もの」がたびたびもつ華美な装飾や脆弱性をもっているかといえばそうでもない。この文章のはじめで、芭蕉布の絣のことをとりあげたが、比嘉春潮の説に従うなら、これが民衆のものとなったのも明治以降のことである。

王朝時代から伝わる沖縄の工芸や芸能には、王族、士族、民衆の区別を問わない美しさがあるということだろうか。それとも王族、士族愛用の「上手もの」や、彼等のつくった芸能にはどこかに「誤ったもの」、「偽りのもの」があるのだろうか。わたしたちは、沖縄の伝統的な文学、芸能、工芸などに現われる沖縄の美をそれ自身として、しかも沖縄の歴史と現実に即して解明していくほかはないようだ。冒頭で述べたように柳にとって窮屈の目標は名もない民衆のための美を問い合わせることであった。わたしたち沖縄の民自身による沖縄の美を解明していく作業は、少なくとも体系的な形ではまだ始められていない。

柳宗悦にとって信仰と美とは切り離せないものであった。信仰あればこそその民衆の美であった。「工芸の歴史を顧みて、それが偉大であった時代を見直す時、如何に倫理性や宗教性が、その偉大さを樹立させた基礎であったかを想ひみないわけにはゆかぬ」。<sup>(26)</sup>「民芸文化がどこまでも精神文化たり得る所以は、それが宗教に根ざす限りに於てである。この根底なくしてどこに正しい民芸論が成り立つであらう」。<sup>(27)</sup>

柳が来沖し、沖縄の文化にふれた叙述を残してからすでに30年、柳流にいえば今や沖縄にとって日本文化も含めた「外来のもの」を攝取する時期はすでに熟しきっており、沖縄固有のもののうえにたった沖縄をつくりあげていかねばならない時代が到来している。しかし、わたしたちの島々に生きる信仰は依然としてわが沖縄の富を支える原理たりうるだろうか。それともこれにかわる新しい信仰を求めるべきだろうか。わたしたちが沖縄の美を解明していく作業において柳美学はひとつの拠りどころとなるであろう。信仰の問題を問い合わせることにおいて、そして沖縄の美の普遍性を求めて続けるということにおいてである。

### 注

- (1) 「沖縄の民芸」『柳宗悦選集』第5巻 63P (以下『選集』とはこの選集をさす)。
- (2) 小野寺啓治「柳宗悦研究資料—琉球〈美の淨土〉の発見—②」『民芸』266号、48P
- (3) 「沖縄の富」『選集』第5巻 30P
- (4) 「沖縄の思ひ出」『選集』第5巻 234～5P
- (5) 『工芸』94号編集後記 (小野寺啓寺「琉球〈美の淨土〉の発見—①」『民芸』263号より)
- (6) 「芭蕉布物語」『選集』第5巻 149P
- (7) 「同上」『同上』153P
- (8) 『工芸の道』『選集』第1巻 87P
- (9) 『同上』86P
- (10) 『日本民芸館』108～9P
- (11) 『工芸文化』『選集』第3巻 189～90P
- (12) 「沖縄の富」『選集』第5巻 10～11P
- (13) 『工芸の道』『選集』第1巻序2～3P
- (14) 「美の法門」『美の法門』7P
- (15) 「芭蕉布物語」『選集』第5巻 186P
- (16) 『琉球教育』第3号(明治29年) 37～8P
- (17) 『琉球教育』第41号(明治32年)『那覇市史』資料篇第2巻中の3 75～6P

- (18) 『那覇市史』資料篇第2巻中の3 364P
- (19) 『那覇市史』資料篇第2巻中の3 357P
- (20) 「地方性の文化的価値」『民と美』(『選集』第7巻) 30P
- (21) 「沖縄人に訴ふるの書」『選集』第5巻 127P
- (22) 日本民芸協会「問題の推移」『月刊民芸』昭和15年3月号(『那覇市史』資料篇第2巻中の3 378P)
- (23) 『那覇市史』資料篇第2巻中の3 367P
- (24) 『工芸文化』97P
- (25) 比嘉春潮「農民の衣料」『比嘉春潮選集』第2巻を参照してもらいたい。
- (26) 「民芸運動は何を寄与したか」『民と美』 366P
- (27) 「美の法門」『美の法門』42P